

氏 名	熊田泰章 (<u>教授</u> 、准教授、専任講師)
こんな研究 をしています	「テクスチュアリティ研究」が専門です。ここのところ書いている論文では、「間文化性＝インターカルチュラリティ」という新しい概念について研究しています。「主体」が他者との関係性の中に構築されるように、「文化」も、実体的に存立しているのではなく、関係的に構築されるものです。「文化」の仕組みをこのように定めることによって、排他的になることと無縁に「個々の文化の独自性」を主張できると考えています。
こんな成果 を挙げています	1. 「図像の働き；非在と在：言葉と図像のナラトロジーを考察する」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第23号、2022年 2. 「世界理解の表出としての言語テキストと図像テキストーボッシュとゴヤの絵画を例としてー」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第17号、2016年 3. 「グローバリゼーションの原理としての記号的従属および動的編成と相互変容ー個人と文化の相互的生成と変容についての一考察ー」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第16号、2015年 4. 「唯一であることの相対的価値についての試論ー芸術作品における内在性と行為性ー」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第15号、2014年 5. 「絵画のナラトロジー試論ー知ることと見ることと語ることの本来的役割同一性についての一考察ー」熊田泰章編『国際文化研究への道ー共生と連帯を求めて』彩流社、2013年
ほかに、こんなジャンル に関心をもっています	自分の研究史として挙げれば、以下のことについて考察してきました、また、継続しています。 1. ヨーロッパ昔話の構造研究・分類研究 / 2. 小説の語りの構造・ナラトロジー / 3. 読者論 / 4. 翻訳論 / 5. 文化記号論
こんな授業 を行なっています	「個」がいかにして存在するに至ったか、また「個」がいかにして表象されるに至ったかについて考察することを通して、「間主観性」「間テキスト性」「間文化性」という概念をつきつめていくことを課題としています。修士課程の授業では、目下のところ、肖像画を取り上げて、トドロフの著作を精読し、加えて、ベームの著作を合わせて読むことで、語ることと図像で描くことの対比を行うことに取り組んでいます。 ツヴェタン・トドロフ『個の礼賛 ルネサンス期フランドルの肖像画』岡田温司・大塚直子訳、白水社、2002年 ゴットフリート・ベーム『図像の哲学 いかにイメージは意味をつくるか』塩川千夏・村井則夫訳、法政大学出版局、2017年
学会や社会 でこんな活動 をしています	日本全国の大学の国際文化学部・国際文化研究科等の教員・大学院生が会員となっている日本国際文化学会で2期にわたり会長を務めました。日本国際文化学会は、大学院生の発表を奨励しています。法政大学では、副学長・常務理事・グローバル教育センター長として、国際交流・大学院運営を担当する職務にあたりました。
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチュラル な人物	Max Lüthi (1909年3月11日 - 1991年6月20日) : ヨーロッパ口承文芸を、個別研究としてではなく、間文化的に共有されるものとして研究した。 Lutz Röhrich (1922年10月9日 - 2006年12月29日) : 口承文芸から現在の文学への広範な相関関係について多くの示唆を得ることのできる研究を行った。私自身、学部卒論に関し、フライブルク大学で研究指導を受けました。